opusdei.org

## 黙想:復活節第2主日

黙想のテーマ:「イエスの傷に触れるトマス」「私たちの信仰を燃やす神の慈しみ」「主の愛に導き入れる主の傷」

イエスの傷に触れるトマス

私たちの信仰を燃やす神の慈しみ

主の愛に導き入れる主の傷

今日のミサの福音は、弟子たちへの 最初のご出現の後、あの時不在だっ た使徒トマスに焦点が当てられてい

トマスの内心の葛藤が想像できます。彼は、毅然とした寛大なられていました。そ誠実な心で愛していましたるためででではなれていか。とれていました。「私たちも行っていました。「私たちも行っていました。「私たちも行ってはないか」(ヨハネ11・16)。また、最後の晩餐で、の場子たちに彼らのよれて、イエスが弟子たちに彼らのある。また、最後である。また、最後の晩餐で、の場子にないからないからないからではないからの場合では、イエスが弟子たちに彼らのもいかがある。また、最後では、イエスが弟子たちに彼らのもいかがある。また、最後では、イエスが弟子たちに彼らのもいかがある。また、最後では、おいまないのもいました。

を見守り天国で待っていると話される意味が分からず、単純に尋ねました。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか」(ヨハネ14·5)。

トマスは、イエスと一緒で幸せでし た。主に従うことを望み、運命を共 にする決意を表明していたのです。 しかし、その使命がどれほど広範囲 にわたるかを理解していませんでし た。キリストの死は、彼に深刻な危 機をもたらしました。しかし、トマ スがいつも表明していた主に従いた いという誠実な望みは、彼が信仰の 光を受け入れることを可能にしまし た。「その不信仰にもかかわらず、 私たちはトマスに感謝すべきです。 トマスは、イエスが生きているとい う他者の言葉を聞くだけで満足しま せんでした。さらには〈肉と骨があ る〉イエスを見るだけでも満足しま せんでした。そうではなく、トマス

はイエスを〈深く〉見たいと望みました。イエスの愛のしるしであるその傷に触れたいと望みました(…)。その愛に触れつつイエスを眺めることが必要です。ただこのようにして、信仰の核心にたどり着き、弟子たちのように、あらゆる疑

いより堅固な、平和に喜びに出会う

ことができます | …。

初めてのご出現の8日後、イエスは 再度、弟子たちに会われます。この 時にはトマスも一緒でした。挨拶 すぐに、主はトマスに向かいて す。「あなたの指をここに当てたの もまたの手を見なさい。またあな入れましての もまたしのわき腹にマスは さい」(ヨハネ20・27)。トマスは さい」でくりし、喜びに打ち震えま も素晴らしい信仰告白の言葉」 飛び出します。「わたしの主、私の神よ」(ヨハネ20・28)。この神の慈しみの主日に、トマスと共に、をしてトマスのうちにおいて、私たち一人ひとりが一緒になって、神のエスの偉大さを観想します。インとは、信じることができずにたいるあの弟子を一驚くだり方で一励ましにいきます。

トマスは理解されていると感じま す。ご出現は、トマスを不信仰へと 向かわせた、恐れと不確かさから解 放する抱擁のようなものです。トマ スが欺かれることに対する恐れによ り、それを燃え立たせることを避け ていたとはいえ、彼の心の奥底には いつも希望の埋火がありました。イ エスの振る舞いや奇跡、その教えや 信じられないほどの愛と慈しみに よって、イエスは信じるに値する方 であると瞬時に気づいたのです。イ エス・キリストと一緒に生活してい たことを思い出し、理解していたこ

とが非常にわずかだったことに驚き ます。

「わたしの主、わたしの神よ」。非 常に短い表現で、信仰と崇拝を美し く表明した後、イエスの愛情深い非 難を受け入れます。「わたしを見た から信じたのか。見ないのに信じる 人は、幸いである」(ヨハネ20・ 29)。全くそのとおりだと考えま す。そして、あらゆる疑いを遥かに 超えて光輝いたこの信仰を広めるこ とに、残りの牛涯を一殉教に至るま で一捧げることになりました。おそ らく、不確かな時もあったことで しょう。しかしトマスは神に信頼 し、信仰の暗闇の中で動くことを学 んでいました。

「トマスのように御身の傷を見なく ても、私の神であることを信じま す」[3]。私たちは、地上を歩まれた

イエスの生活に触れたり、見たりせ ずに、またその復活に立ち会うこと もせずに、信じることを求められて います。しかし、私たちの信仰は、 トマスや使徒たちが宣言したのと同 じです。そして私たちも彼らと同じ く、世界中に福音を広めるように招 かれています。それを実現するに は、主と親密に交わり、主の慈しみ を頼りにすることです。不信仰な使 徒たちに現れて、傷を示されたキリ ストご自身が、私たちに望んでおら れるのです。 | 支配を押しつけよう とはなさらずに、静かに傷ついた御 手をお見せになり、ほんの少しなり とも……と人々の愛を乞うておられ ますして

イエスは、私たちが主の命に与ることができるようにと、その源泉を開こうと思われたのです。主の傷は、トマスと他の使徒たちにとって、主の愛のしるしになりました。それを見て、彼らが嘆き悲しむのは当然だ

と思えますが、そうではなく、彼らは、平和に満たされたので残ることのが残るした一は、そののが残るしたと望まれました一は、そのあることのもない。それを見つめな応い自己の冷淡らのに陥らのない。それらのであることの証拠なのであることの証拠なのであることのである。

「イエスの傷は信仰にとってつまず きですが、それはまた信仰を確かめ るものでもあります。そのため、復 活したキリストのからだにおいて、 傷はなくならないのです。なぜな ら、この傷は、わたしたちに対する 神の愛の永遠のしるしだからです。 それは、わたしたちが神を信じるた めに不可欠だからです。それが不可 欠なのは、神が存在することを信じ るためではなく、神が愛であり、あ われみであり忠実な方であることを 信じるためです。聖ペトロは、イザ ヤを引用しながらキリスト者にこう書き送ります。『そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました』(一ペトロ2・24、イザヤ53・5参照)」[5]。「信仰の完全な鏡」である聖マリアに、トマスのようにイエスの傷に触れることができるようお願いしましょう。

<u>[1]</u> フランシスコ、説教、2018年4月 8日。

[2] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2006年9月27日。

[3] 聖体賛歌Adoro Te devote。

[4] 聖ホセマリア『知識の香』179 番。

[5] フランシスコ、説教、2014年4月27日。

[6] フランシスコ、回勅『信仰の 光』58番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-fukkatsusetsu-shujitsu2/(2025/12/15)